様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２１６０４

研究課題名（和文）「日本的なるもの」はどのように語られてきたか？――分野横断的比較と俯瞰的分析

研究課題名（英文）adasfaldfs

研究代表者
佐倉　統（Sakura, Osamu）

東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授

研究者番号：００２５１７５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,600,000円

研究成果の概要（和文）：科学技術、音楽、民俗学、建築、文学、美術などの諸領域で、「日本的」というイメージが明治期以降どのように使われてきたかを横断比較した。各分野に共通の傾向として、外国からの新しい文化潮流が流入してきたときにそれへの反応として「日本的なるもの」への関心が高まり、さまざまな定義が創造されていくという現象が見られた。また、近年ではむしろ日本国内では「日本的なるもの」についての関心が薄れているのに対し、諸外国からそのようなステレオタイプで見られる場合もあり、ある種のねじれが生じていることも少なくない。一方で、「日本的」とされたときにどの時代のどのような様式を指すかは分野ごとに異なり、恣意的ですらある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「日本的なるもの」という概念はさまざまな分野で時に称揚され、批判され、利用されてきた。しかしそこでイメージされている内実が、分野や時代や発言者によってどの程度異なりどの程度同じものなのか、そしてどの程度専門的な裏付けがあるものなのかは、今まで曖昧なままであった。それがしばしば過度の国粋主義称揚などの悪しき事態をもたらす一因ともなってきた。このプロジェクトでは明治以降の日本における「日本的なるもの」の内実と使用される文脈を科学技術、音楽、建築、民俗学、文学、美術などの異なる領域で相互に比較検討し、多面的なこの概念の明確化を目指した。分野間での共通点と相違点、注意点を浮き彫りにすることができた。

研究成果の概要（英文）：A cross-sectional comparison was made of how the image of "Japaneseness" has been used since the Meiji period in various fields, including science and technology, music, folklore, architecture, literature, and art. A common trend in each area was a growing interest in "what is Japanese" as a response to the influx of new cultural trends from abroad and the creation of various definitions of the term. In recent years, while interest in "what is Japanese" has waned in Japan, it is sometimes stereotyped as such by foreign countries, often resulting in a particular twist. On the other hand, when something is considered "Japanese-ish," the period and style it refers to varies from field to field and is even arbitrary.

研究分野：科学技術社会論

キーワード：文化史　科学技術史　民俗学　建築史　音楽史　美術史　文学史　日本の近代化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
いわゆる日本論（日本人論や日本文化論などを含む。以下、単に「日本論」とする）については、古くから、人文・自然科学だけでなく、政治経済体制や芸術、スポーツなども含めてさまざまな分野で語られている（青木保『「日本文化論」の変容』1990；船曳建夫『「日本人論」再考』2003；大久保喬樹『日本人論の系譜』2003 など）。中国文明を取り入れ始めてから現代に至るまで、極端に言えば日本と日本人は常に自分たちのアイデンティティを模索してきたともいえる。

しかし「日本的なるもの」が実際にどのように語られてきたかに関するメタレベルでの研究は、そのほとんどが、総体としての日本論を対象とするか、「文化」の名の下にさまざまな領域を包含して一括して扱ってしまうものに限られており、各個別分野における日本的特性の評価や分析を踏まえて「下から」組上げていく作業はほとんどなされていない。また、その際の「日本文化」は思想や文学などを主とすることが多く、建築、医学、技術、科学などが対象とされることは多くない（たとえば『日本文化論キーワード』［遠山・中村・佐藤編，2009］にはこれらの理工学的な項目はほとんど言及されていない）。そのため、総体としての日本論と個別具体分野における日本論との整合性や相互関係は、明確に検討されないままになっている。

日本が古代より外部からの影響を受けつつ、独自の社会と文化を熟成してきたことは事実であるが、その内実を明確に把握することなく表層的で感覚的なイメージに寄りかかった「日本的」というラベルだけが横行したことも少なくない。とくに近年は、極端なグローバル化による文化の独自性の否定と、その裏返しとして単純かつ過度な愛国主義的言説の両方が入り乱れており、ヘイトスピーチや民族差別的言説も後を絶たない。このような状況下、学術的かつ専門的な見地から、日本とその国民たちが自らをどのようにイメージしてきたかを明らかにしてひとつの「規矩」を提供することは、社会的にも必要である。

２．研究の目的
この研究では、「『日本的』という標語がどのように語られてきたか」を、建築、思想、音楽、民俗学、科学・技術などの複数の分野で横断的に比較し、おもに近代・現代における「日本的」イメージの多様性を総覧するとともに、共通性を抽出することを目的とする。「日本的とは何か」ではなく、各個別分野における「日本的の語られ方」が研究対象である。

近代以降「『日本的』という標語がどのように語られてきたか」を、建築、民俗学、政治思想、音楽、科学技術などの分野で横断的に比較し、近代・現代における「日本的」イメージの多様性を総覧するとともに共通性を抽出する。またこれらの作業により、国際社会において外に向かって私たちはみずからのことをどのように語ればよいのか、学術的な示唆を得ることも目的とする。

３．研究の方法
対象は明治以降の言説に限定する。現在の問題に直結するのは、日本が近代化を成し遂げ、その過程で自らのアイデンティティを再編成してきたこの時代の趨勢だと考えるからである。

方法論としては、「比較集団知」あるいは「半構造化集団討議」と称しうる方法を試みる。明治以降の各分野において「日本的」概念がどのように語られてきたかについて、研究代表者と分担研究者らの合議によって共通項目を複数抽出し、次にそれらの項目における各分野の知見や言説内容を報告しながら情報を比較・共有するという試みである。これにより、分野を越えた共通性と各分野の特異性を明らかにすることができると考えている。

この方法が機能するためには、各研究分担者がそれぞれの領域における「日本論的言説」を熟知しており、すでにそのようなコーパス的あるいは認識論的な知見を十分に有していることが前提として必要である。分担研究者は、建築（五十嵐太郎）、政治思想および音楽（片山杜秀）、民俗学（菅豊）、科学技術（佐倉統＝応募者）の各分野において、日本的特性の内実とその語られ方を長年研究してきた専門家であり、それぞれ客観的かつ十分な知見を所持していると考えているが、この前提が成り立つことをどうやって担保するかも含め、方法論自体の厳密性と妥当性を高めていくための模索も、本研究の目的のひとつである。このメンバーでカバーできない領域（文学、美術など）については、適宜専門家を研究会に招聘して知見を共有する。必要に応じて研究協力者や分担者の追加を行なう。

４．研究成果

(1) 分野間の共通点

科学技術、民俗学、建築史、政治史、美術、文学、祭礼などの諸領域について、各分野の専門家が「日本的」言説の状況を報告し、他分野との異同を他の研究者が比較検討する作業を積み重ねた。その結果、分野間の共通点と相違点がある程度明確になった。

共通点は、当該領域におけるそれまでの営みが変革を余儀なくされる際に、新たな拠り所として「日本的なるもの」が注目され、なかば恣意的に利用されるというパターンである。変革のきっかけは、多くは外的な要因である。明治期以降においてはすなわちそれは西洋文明との本格的な接触によって、学術界や芸術界などがどのように自分たちの活動のアイデンティティを確立するかという問題に直面したとき、一方的に西洋文明に同化するのではない選択肢としてさまざまな可能性を模索する過程で繰り返し表れてきたことが、どの分野・領域においても確認される。

その内実は、過去を懐古的に振り返る保守的・愛国主義的な装いをとることが多いが、一方で既存パラダイムの代替枠組みとしての未来志向的・改革的な側面も合わせ持つことが要求され、このアンビヴァレンスを内在させたまま事態が推移していく状況が分野を越えて共通に見られる。

このプロジェクトでは主として明治以降の時代を対象としたが、このようなパターンの少なくとも一部ははるか以前からも見られていたとの指摘もなされた（例えば、平安時代の国風文化の隆盛）。

(2) 分野間の相違点

一方で、その担い手となる層や主体は分野や状況によりさまざまである。斯界の権力者が「日本的」概念を前面に押し出す分野や事例もあれば、権力とは無関係にボトムアップ的な力学の原動力として「日本的」概念が拠り所になることもある。分野によって異なるだけでなく、同じ分野でも時代や状況によって異なる表われ方をすることは珍しくない。

この「日本的なるもの」は、古来の伝統的な性質の再発見という形を取ることが多いが、それがどの程度学術的に根拠のあるものなのかはさまざまである。学術的、専門的に意義のある「再発見」であることもあれば、捏造とは言わないまでも、イメージの創作に近いような事例も見られる。

また、近年ではむしろ日本国内では「日本的なるもの」についての関心が薄れており、そのようなものを問うこと自体に意味も関心も持たない若手・中堅の作家や表現者が増えているのに対し、彼ら／彼女らの生産物が諸外国から「日本的である」というステレオタイプで見られる場合も珍しくなく、ある種のねじれの構造が生じていることも少なくない。

(3) 総括的意義と課題

これらの動向を異なる複数分野で横断的に比較した知見は今までになく、本プロジェクトの独創的な成果である。この成果は叢書として東京大学出版会から出版することが決定している。学術界からも一定の評価が得られることと思う。

一方で、このような特徴は抽出できたものの、分野間での比較検討作業をより精緻精密に深化させることは十分にはできなかった。各分野および各事例の特性を同じフォーマットで相互に比較することが不十分だったからである。ひとつの理由は新型コロナ感染症の流行により、2年度目と３年度目の研究会をすべて遠隔で行わざるをえない状況になったことである。Zoom による遠隔会議は情報交換には十分であるものの、創発的な議論をおこなうことはきわめて難しく、得られた知見を踏まえてより高次の検討を相互に行うことは困難であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 佐倉統	４．巻 25
２．論文標題 自動運転を社会の側から考える	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 67-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5363/tits.25.5_67	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐倉統	４．巻 100
２．論文標題 研究業績とは何（であるべき）か？	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Osamu Sakura	４．巻 -
２．論文標題 Robot and Ukiyo-e: Implications to Cultural Varieties in Human-Robot Relationships	５．発行年 2021年
３．雑誌名 AI & SOCIETY	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00146-021-01243-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐倉統	４．巻 25(12)
２．論文標題 「新しい知見」が意味するところは専門家と社会とで異なる	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅豊	4．巻 39
2．論文標題 （ハングルが表示されません）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 実践民俗学研究	6．最初と最後の頁 9-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅豊	4．巻 2021年第1期（第5輯）
2．論文標題 非物質文化遺産的幻影	5．発行年 2022年
3．雑誌名 遺産	6．最初と最後の頁 153-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅豊	4．巻 229
2．論文標題 近世・近代移行期の歴史的もつれあい	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人民の歴史学	6．最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 五十嵐太郎	4．巻 2021年4月号-2022年3月号
2．論文標題 日本橋の建築装飾（第1-12回）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 月刊　日本橋	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 五十嵐太郎	4．巻 -
2．論文標題 ポストカタストロフの新景観	5．発行年 2021年
3．雑誌名 「シン・エヴァンゲリオン」を読み解く（河出書房新社）	6．最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　10件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 佐倉統
2．発表標題 社会と文化の側から科学技術を考える
3．学会等名 第43回日本神経科学大会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 佐倉統
2．発表標題 科学技術は誰のもの？――歴史的に振り返って考える
3．学会等名 第30回日本神経回路学（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 石川開，水上拓哉，戸田聡一郎，猪口智広，前田春香，福住伸一，佐倉統
2．発表標題 AIの倫理的・社会的問題の類型化を試みる――事例研究を通じた問題構造の比較分析
3．学会等名 第34回人工知能学会全国大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 Osamu Sakura
２．発表標題 Robots, Ukiyo-e and Apes: A Preliminary Approach to Cultural Diversity in Human-AI Relations
３．学会等名 The 4th Global Artificial Intelligence Technology Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐倉統
２．発表標題 挑発に応答はあったか？―挑発としての展示、その後とこれから
３．学会等名 日本展示学会第38回研究大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐倉統・福住伸一・中川裕志
２．発表標題 人-AI関係の文化差を共視論から考える：試行的分析
３．学会等名 第33回人工知能学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐倉統
２．発表標題 AIは友達なのか下僕なのか敵なのか？
３．学会等名 日本発達神経科学学会第８回学術集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 菅豊
２．発表標題 探討中日民俗学中“共有資源論”的可能性
３．学会等名 人文東亞研究工作坊 第十期“共有資源：民俗學視野下的東亞社會（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅豊
２．発表標題 中国における「遺産」政策と現実との相克―ユネスコから「伝統の担い手」まで―（原題はハングル）
３．学会等名 韓国實踐民俗學會、國立民俗博物館主催国際シンポジウム「東アジアにおける文化遺産と日常のポリティクス」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅豊
２．発表標題 民俗学の喜劇―“低微（humble）”な学問の可能性―
３．学会等名 東南大学外国語学院主催国際シンポジウム「21世紀の中日民俗学への展望」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅豊
２．発表標題 UNESCO的無形文化遺産制度能保護文化多様性［口偏に馬］？―全球化時代普遍価値與地方性価値的相克
３．学会等名 浙江師範大学、浙江省民俗文化促進会、浙江師範大学郷村振興研究院主催国際シンポジウム「2021年非遺伝承與現代生活（国際）学術検討会」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅豊
２．発表標題 パブリック・フォークロアとはなにか？―その可能性と課題―
３．学会等名 KU-ORCAS研究集会「日本におけるパブリック・ヒューマニティーズ／公共人文学の現在地」（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計6件

１．著者名 佐倉統	４．発行年 2020年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 270
３．書名 科学とはなにか ： 新しい科学論、いま必要な三つの視点	

１．著者名 M. Keller, N.R. Fuller, 佐倉統（日本語版監修）	４．発行年 2020年
２．出版社 いそっぷ社	５．総ページ数 191
３．書名 ダーウィン『種の起源』を漫画で読む	

１．著者名 五十嵐太郎	４．発行年 2020年
２．出版社 みすず書房	５．総ページ数 232
３．書名 建築の東京	

１．著者名 五十嵐太郎、菊池尊也	４．発行年 2022年
２．出版社 彰国社	５．総ページ数 429
３．書名 現代建築宣言文集[1960-2020]	

１．著者名 五十嵐太郎	４．発行年 2021年
２．出版社 エクスナレッジ	５．総ページ数 295
３．書名 世界の名建築歴史図鑑	

１．著者名 五十嵐太郎	４．発行年 2021年
２．出版社 日本設計学会	５．総ページ数 -
３．書名 ポストバブルの建築家展	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔キュレーションを担当した海外巡回展に関わる講演〕
五十嵐太郎「Japanese Contemporary architecture Through the exhibitions which I organized」（「Quand La Forme Parle」展オープニングのシンポジウム、パリ日本文化会館、2021年11月27日）査読なし

五十嵐太郎　日本の窓を紹介する展覧会コンセプトのレクチャー（「Windowology: New Architectural Views from Japan」展、ジャパンハウス・ロンドン、2022年1月27日）査読なし

五十嵐太郎　日本の窓を紹介する展覧会コンセプトのレクチャーと対談（「Windowology: New Architectural Views from Japan」展、ジャパンハウス・サンパウロ、2021年7月14日）査読なし

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	五十嵐　太郎 (Igarashi Taro) (40350988)	東北大学・工学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	片山　杜秀 (Katayama Morihide) (80528927)	慶應義塾大学・法学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	菅　豊 (Suga Yutaka) (90235846)	東京大学・東洋文化研究所・教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関